

[研究ノート]

## フルシチョフと教皇ヨハネ 23 世の首脳外交

藤 井 陽 一

### はじめに

2014年4月27日、ローマ・カトリックの新教皇フランシスコによって、故教皇ヨハネ 23 世（在位 1958–1963）と故教皇ヨハネ・パウロ 2 世（在位 1978–2005）が列聖された。ソ連との関係での両者の共通点は、当時のソ連指導者の代理、あるいは、指導者本人と公式に会見した点である。1963年3月、ソ連共産党第一書記兼閣僚会議議長ニキータ・フルシチョフの次女で『科学と生活』誌編集長ラーダと、彼女の夫で『イズヴェスチヤ』誌編集長アレクセイ・アジュベイがヨハネ 23 世に謁見し、教皇はソ連指導者を直接会談のためにローマに招待した。その4半世紀後の1988年6月13日、ヴァチカンの國務長官で司教枢機卿（Cardinal Bishop）アゴスティノ・カザロルリがヨハネ・パウロ 2 世の特使としてミハイル・ゴルバチョフと会見し<sup>(1)</sup>、教皇は、翌年12月にソ連共産党書記長としての、1990年11月18日にソ連初代大統領としてのゴルバチョフの公式訪問を受けた。

この4半世紀間のソ連とヴァチカンとの関係を概観すると、ゴルバチョフのヴァチカン訪問は決して突飛なことではなかったことが分かる。ヨハネ 23 世死去後、新教皇パウロ 6 世（在位：1963年6月–1978年8月）は、前教皇路線に従い、ソ連最高会議幹部会議長ニコライ・ポドゴルヌィ（1967年1月）やアンドレイ・グロムイコ外務大臣といったソ連政府高官との会見を重ねて前教皇の平和共存路線を継承させ、ソ連・ヴァチカン関係を維持した。グロムイコは、1963年から1985年まで計8回（初回：ヨハネ 23 世、5回：パウロ 6 世、2回：ヨハネ・パウロ 2 世）教皇と会見し、いずれもヴァチカン側からの働きかけであったと述懐している<sup>(2)</sup>。また、「ヴァチカンのヘンリー・キッシンジャー」とも称されるカザロルリ卿は、1960年代半ばにハンガリーとチェコスロヴァキアを訪問し、各政府との交渉で両国での宗教の自由に関する合意を得、1966年6月にはユーゴスラヴィアを訪問してベオグラード議定書を交わすなど<sup>(3)</sup>、交渉によって共産圏でのキリスト教への抑圧軽減に成功した。東欧諸国懐柔手段として、教皇庁が1960年代から表面的にはいずれの陣営にも与しない中立の立場を取ってきたことも、成功の要因であった。しかし、こうした後期ソ連とヴァチカンとの外交関係の展開は外交史においても宗教学においてもあまり重要視されてこず、ゴルバチョフのヴァチカン公式訪問は多くの人々を驚愕させた。

1 Anatoly S. Chernyaev, *My Six Years with Gorbachev* (Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 2000), p. 162; アナトーリ・チェルニャーエフ（中澤孝之訳）『ゴルバチョフと運命をともにした2000日』潮出版社、1994年、161頁。

2 Громыко А.А. Памятное. Кн. 2, М., 1988. С. 39–40.

3 Desmond O'Grady, "Vatican Moving toward Soviet Talks," *The Pittsburgh Press*, Nov. 27, 1976, p. 4.

第2次世界大戦後のソ連とローマ教皇庁との関係に関する日本での著書は、管見の限り、多津木慎著『キリストとマルクス』<sup>(4)</sup>や橋本昭一著『バチカンの行動原理』<sup>(5)</sup>、小坂井澄著『法王ヨハネ二十三世』<sup>(6)</sup>等があるが、国内での研究は殆どソ連当局とロシア正教会や東方典礼カトリック教会等、東方教会との関係に関するものである。ソ連とローマ教皇庁との関係に関する研究はヨーロッパ史研究者、菊池守が『世界』誌に寄稿した「ヴァチカンとクレムリン」<sup>(7)</sup>、及び、松本佐保著『バチカン近現代史』<sup>(8)</sup>がある。前者は古代ローマ時代からハンガリー動乱鎮圧までのローマ・カトリック教会と東西ヨーロッパ諸国との関係、ハリストス正教会と帝政ロシア、そしてソヴィエト政権との関係を網羅的に叙述したものである。後者では教皇ヨハネ23世の次の教皇パウロ6世と共産圏との関係改善に重点を置いており、ヨハネ23世に関する叙述は共産圏というよりも寧ろ共産主義に対する彼の態度であり、しかも数行のみである。

西欧での近年の先行研究では、第2次世界大戦中については、ドナル・オサリヴァンが1944年におけるヨシフ・スターリンとヴァチカンとの関係を新資料に基づいて検証した<sup>(9)</sup>。大戦後については、教会史家ロナルド・サーニー＝ヴェルナーが著書『ヴァチカンの東方政策とドイツ民主共和国』の中でヴァチカンの対ソ政策についても多くの紙数を割いて言及している<sup>(10)</sup>。第2回ヴァチカン公会議研究センター書記のカリム・シェルケンスは、教皇庁がキューバ危機の際に熱核戦争勃発回避のためにどのように動いたか、また、第2回ヴァチカン公会議開催準備の一環としてウクライナ・カトリック教会のヨゼフ・スリピー大司教釈放のためにソ連当局にどの様に働きかけたかを明らかにした<sup>(11)</sup>。対共産圏外交に批判的なカトリック保守派は、教皇庁が1962年にソ連当局と交わした密約、所謂「メッツ協定」に関する著書や論文を近年公表し、教皇庁の共産主義への宥和政策の内実を暴露した<sup>(12)</sup>。このように西欧の先行研究は豊富にあるものの、いずれもヴァチカン側からの視点に偏重している。1950年代末から1960年代初頭にかけてソ連とローマ教皇庁との間で「雪解け」が可能になった経緯をより詳らかにするためには、ソ連・ロシア側からの資料も必要である。

4 多津木慎『キリストとマルクス：東欧思想紀行』サイマル出版会、1972年。

5 橋本昭一『バチカンの行動原理：近代教皇たちの社会回勅』コルベ出版社、1980年。

6 小坂井澄『法王ヨハネ二十三世：怒涛の世紀とともに』ドン・ボスコ社、2000年。

7 菊池守「ヴァチカンとクレムリン1～7」『世界』岩波書店、1958年9月-1959年7月。

8 松本佐保『バチカン近現代史：ローマ教皇たちの「近代」との格闘』中央新書、2013年。

9 Donal O'Sullivan, "Stalin and der Vatikan — Zu einem Dokument aus dem Jahr 1944," *Forum für osteuropäische Ideen- und Zeitgeschichte*, Jhrg.3, Heft 2 (1999) [<http://www.ku.de/forschungseint/zimos/publikationen/forum/dokumente/stalin-vatikan/>]. 以下、URLは2015年2月22日現在有効。

10 Roland Cerny-Werner, *Vatikanische Ostpolitik und die DDR* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011).

11 Karim Schelkens, "Vatican Diplomacy after the Cuban Crisis: New Light on the Release of Josyf Slipyj," *The Catholic Historical Review* 97, no. 4 (2011), pp. 679-712.

12 Jean Madiran, *L'accord de Metz: ou pourquoi notre Mère fut muette* (Versailles: Via Romana, 2007); Edward Pentin, "Why Did Vatican II Ignore Communism?" *The Catholic World Report*, Dec. 10, 2012 [[http://www.catholicworldreport.com/Item/1798/why\\_did\\_vatican\\_ii\\_ignore\\_communism.aspx#.UtJSoOmIoal](http://www.catholicworldreport.com/Item/1798/why_did_vatican_ii_ignore_communism.aspx#.UtJSoOmIoal)].

近年、ヨハネ 23 世とフルシチョフとの関係に関する回想録や研究がロシアで公表されてきた。例えば、フルシチョフの次女ラーダの回想を基に、彼女と彼の夫アジュベイが教皇に謁見した際の経緯を述べた記事がロシア紙に掲載された<sup>(13)</sup>。また、当時タス通信のイタリア特派員であったアナトリー・クラシコフは、ヨハネ 23 世の秘書官であったロリス・フランチェスコ・カポヴィツラ大司教を招いて当時のヴァチカンとソ連との折衝に関する対談を行い、その内容を新聞に掲載した<sup>(14)</sup>。1940 年代のソ連・ヴァチカン関係については、ロシア宗教学者協会会長ミハイル・オディンツォフが研究成果を発表している<sup>(15)</sup>。しかし、ヨハネ 23 世在位期間中のソ連とローマ教皇庁との関係改善に向けた様々な動きやその背景に関する研究は、管見の限り、まだロシアでは十分に為されていない。

ゴルバチョフのヴァチカン公式訪問の歴史的背景を考察するに際して、フルシチョフとヨハネ 23 世との協調の過程を、前述した最近の西欧とロシア双方の研究成果を用いて再構成するのは有意義であろう。本稿では、フルシチョフ期ソ連でのローマ・カトリック研究を参考にしつつ、ソ連とヴァチカンの双方が歩み寄った理由や事情を追及し、その詳細な過程を描出することを目指す。なお、本稿は、主にフルシチョフとローマ教皇ヨハネ 23 世との首脳外交に焦点を当てるものであり、ソ連当局と、ロシア正教会や東方典礼カトリック教会等、東方教会との関係は考察の対象外とすることを予め断っておく。

## 1. 独ソ戦勃発から 1958 年 10 月迄のソ連・ヴァチカン関係

本節では、教皇ヨハネ 23 世と先代の教皇達との相違点を明示するために、第 2 次世界大戦期から 1958 年 10 月に即位するまでの期間のソ連・ヴァチカン関係を検証する。

教皇ピウス 11 世（在位：1922 年 - 1939 年 2 月）は、1937 年 3 月、回勅「深き憂慮に満たされて」で、ナチス統治下でのカトリック教会の苦境を憂慮し、ヒトラーとナチズムを暗に批判したが、同じ月に別の回勅「聖なる贖い主」（*Divini Redemptoris*）で共産主義を「本質的に邪悪なもの」と断罪し、ナチズムよりも共産主義に対して敵意を剥き出しにした。その結果、前年までソ連国内のカトリック教会で働いていた 50 数人程司祭が、この回勅発布後 10 人にまで減った。アルザス地方出身の司教アレクサンダー・フリゾンはドイツのスパイとして射殺され、67 ものカトリック教会が当局によって閉鎖され、1939 年には立ち入りできる教会はモスクワとレニングラードのみとなり、司祭は一人しかいない状態にまで追い込まれた<sup>(16)</sup>。

独ソ戦勃発後、ソ連が連合国側となるや、米国政府はヴァチカンの対ソ態度が肯定的にな

13 *Богданов В.* Хрущев постучался к Папе // Российская газета. 27.12.2007.

14 *Красиков А.* Крестьянский сын на папском престоле // Независимая газета. 19.11.2008.

15 *Отдельский М.И. (Одинцов М.И.)* Советский Союз и Ватикан, положение католических и униатских церквей в СССР в годы войны // Свобода совести в России: исторический и современный аспекты. Сборник докладов и материалов международных, общероссийских и межрегиональных научно-практических семинаров и конференций. 2004–2005 гг. Выпуск 2. М., 2005 [http://www.rusoir.ru/president/works/187/].

16 O'Sullivan, "Stalin und der Vatikan," p. 295; Cerny-Werner, *Vatikanische Ostpolitik*, p. 49.

ることに関心を抱いた。1941年9月3日フランクリン・ルーズヴェルト大統領は、教皇ピウス12世（在位：1939年3月–1958年10月）宛てに親書を送り、ロシアの独裁者がドイツのそれに比べれば他国の安全保障にとってほとんど危険性はないと確信していること、また、宗教生活に関してもロシアの独裁形態の方がドイツのそれよりも好ましいことを訴えた。これを受けて教皇は米国の司教達に、「聖なる贖い主」は爾後の対ソ軍事・経済援助を予測していなかったの、従来のプラグマティズムと慎重さを再び取り戻すように通知した<sup>(17)</sup>。

他方で教皇は先代の姿勢を継承し、大戦中は、ナチス・ドイツによるソ連駆逐を期待し、ドイツの敗北は欧州におけるソ連の立場強化を招くと考えていた。彼は、日独伊無条件降伏までの戦争継続という、ルーズヴェルトとウィンストン・チャーチル英国首相によるカサブランカ会談（1943年1月）の共同声明を糾弾し、ローマ陥落の1944年5月時点でさえ、共産主義と無神論のソ連に比べれば「より邪悪度と危険度が低い」ヒトラーとの妥協の可能性を考慮し、ドイツ敗北を望んでいなかった<sup>(18)</sup>。

一方ソ連は、1943年末から1944年にかけて西方の領土をドイツから奪回しつつあった。赤軍が更にポーランド等、ローマ・カトリック教会が社会的・政治的力を持ってきた東欧諸国を掌握しつつある頃、ソ連指導部にとってはカトリック聖職者や信者達との衝突防止が問題として浮上した。ロシアの宗教学者ミハイル・オディンツォフに拠れば、ローマ教皇庁がソ連領内や東欧諸国内のローマ・カトリック教会に持つ影響力を制限するよう、政治局は1943年9月に英米との交渉を外務次官マクシム・リトヴィノフに当たらせるが両国から断られた。それゆえ、やむなくローマ・カトリック教会との衝突を避ける必要から、ヴァチカンとの関係修復が愁眉の問題となった。そこで指導部は、ヴァチカンやソ連領内の宗教組織の指導者達と恒常的に接触を図るという課題を外務省や、国家保安人民委員部（НКГБ）、1944年に人民委員会議（Совнарком）の附属機関として新設された宗教信仰問題評議会（Совет по делам религиозных культов）等の特別機関に課した。同時に、ヴァチカンとの関係正常化を希望する旨を公式に発表した<sup>(19)</sup>。

同時期に、ソヴィエト指導部は1944年2月に、駐米大使アンドレイ・グロムイコを通じて、ルーズヴェルト大統領に、ポーランド人でシカゴ大学教授オスカー・ランゲ、及び、ポーランド系アメリカ人でマサチューセッツ州教区司祭のスタニスワフ・オルレマニスキー<sup>(20)</sup>にソ連へ渡航するためのパスポートを与えるよう個人的な力添えを依頼し、これに対し大統領は国務省の反対を押し切って二人に渡航許可を与えた<sup>(21)</sup>。スターリンと外務人民委員ヴァ

---

17 O'Sullivan, "Stalin und der Vatikan," p. 295; Myron C. Taylor, *Wartime Correspondence between President Roosevelt and Pope Pius XII: With an Introduction and Explanatory Notes* (New York: Macmillan, 1947), pp. 61–62.

18 Одинцов, Советский Союз и Ватикан.

19 Там же.

20 ランゲとオルレマニスキーの二人は、John Earl Haynes and Harvey Klehr, *Venona: Decoding Soviet Espionage in America* (New Haven: Yale University Press, 1999) の中で、1940年代にワシントン D. C. で活躍した KGB スパイリストに挙げられている。

21 Halik Kochanski, *The Eagle Unbowed: Poland and the Poles in the Second World War* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2012), p. 441.

チェスラフ・モロトフは 1944 年 4 月 28 日と 5 月 4 日にオルレマニスキーと会見した。オルレマニスキーはスターリンに、もし米国でカトリック勢力の共感を得られることに成功すれば、米国大統領に誰が選出されようとスターリンにとってはどうでもよくなるだろうと述べた。これに対してスターリンは、もしソヴィエト政府がカトリック教会に対する抑圧政策に着手しようとしていると米国で本当に思われているのであればそれはとんでもないことであり、ソ連は宗教を迫害する者への抑圧に着手していると伝えた<sup>(22)</sup>。司祭は米国に帰国後デトロイトでの記者会見でスターリンは自身を良心の自由の庇護者であると思っていると述べた。ドイツ人研究者ドナル・オサリヴァンによれば、当時米国では反ソ感情が広まっており、ソヴィエト指導部としては、レンドリース法<sup>(23)</sup>による米国からの対ソ軍事援助が打ち切られないように、ソ連では宗教の自由が保障されていることを宣伝する人物が必要であり、スターリンは自国のイメージ戦略として一介の司祭を利用したということである<sup>(24)</sup>。

並行して、東方典礼カトリック教会の指導者との恒常的な接触も計画されたが、首都大司教アンドレイ・シェプティツキーが 1944 年 11 月に病死したために実行されなかった。リヴィウで執り行われた葬儀には、その当時、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国の人民委員会議議長兼ウクライナ共産党第一書記であったニキータ・フルシチョフが出席した。ソ連当局はヨゼフ・スリピーを公式な後継者と認識し、彼との交渉を始めた。その後、スリピーがユニエイト教会の自己解体（самоликвидировать）という当局からの提案を拒絶すると、1945 年 4 月から 5 月にかけて東方典礼カトリック教会の司教や司祭達はドイツ・ファシスト占領期間中の反逆罪の廉で逮捕された<sup>(25)</sup>。

1944 年の年末、後に教皇ヨハネ 23 世となるアンジェロ・ロンカッリ（1881–1963）が駐仏ローマ教皇庁大使、つまり、大使の地位を持つ教皇の外交代表としてパリに派遣された。この地に赴く前に彼は既に勤務先のアンカラで駐土ソ連大使セルゲイ・ヴィノグラドフ（1907–1970）と、パリでは駐仏ソ連大使アレクサンドル・ボゴモロフ（1900–1969）と知己になった。その他、仏急進社会党党首のエドゥアル・エリオや社会党創設に参加したヴァンサン・オリオールのような主に左派系政治家や社会活動家らとも交流を深めた<sup>(26)</sup>。

農民の出自で、その後ローマ・カトリック教会外交官となったロンカッリとは対照的に<sup>(27)</sup>、教皇により貴族に列せられた名門の出であるピウス 12 世は、1948 年のクリスマス・メッセー

22 Волокитин Т.В. (Отв. ред.) Советский фактор в Восточной Европе. 1944–1953. Документы. Т. 1 (1944–1948). М., 1999. С. 60.

23 The Lend-Lease Acts. または武器貸与法。米国が 1941 年から 1945 年にかけて連合国に対して軍需物資を供給するプログラム。ソ連に対しては 1941 年 10 月から 1945 年 9 月まで軍需品が無償で提供された。

24 O'Sullivan, "Stalin und der Vatikan," p. 297.

25 Отдельский, Советский Союз и Ватикан.

26 Митр. Никодим (Ротов). Иоанн XXIII, папа Римский // Богословские труды. Сб. 20. 1979. С. 100, 235 (сноска 48).

27 多津木はロンカッリの庶民的開放性を表す例として、彼が枢機卿時代に、司祭や司教に対して権威主義とパターンリズム（父子温情主義）を排するよう訴えたこと、及び、彼が前触れもなく一人で病院を訪れたり刑務所に顔を出したりするので記者達から「Johnny Walker」の愛称で呼ばれていることを挙げている。多津木『キリストとマルクス』179 頁。

ジの中の「新しい戦争の悪夢」のくだりで、不当な攻撃を予防するための武装抵抗権について述べた<sup>(28)</sup>。また、翌年7月には、ソ連国内に140万人、東欧の共産圏に510万人いるカトリック信者<sup>(29)</sup>が当局から迫害を受けるおそれがあるにもかかわらず、共産党員に対して破門を宣告した<sup>(30)</sup>。彼はさらに、1952年7月に全ロシアの人民に向けたメッセージで、共産主義が誤った考えであることを説き、三位一体の神の信仰、聖母マリア崇拝を訴えた<sup>(31)</sup>。

スターリン死後に平和共存の雰囲気がやや醸成されてくると、教皇は、1954年のクリスマス・メッセージで、キリスト教徒は共産主義を歴史の一つの現象又はほとんど不可避の発展段階としてみなくてはならない旨述べ、従来に比べて柔軟姿勢を見せた。また、それに対してソ連側も1955年7月、対西側への融和アピールとして、米英仏首脳とのジュネーヴ会談の直前に、ハンガリー当局によって拘留されていたミンツェンティ枢機卿を体調不良を理由に釈放した<sup>(32)</sup>。ところが、1956年にカトリック信者が多いハンガリーの動乱がワルシャワ条約機構軍に鎮圧された後、ピウス12世は、1930年に前教皇がそうした様に、クリスマス・メッセージで聖戦を呼びかけ、再びソ連とローマ教皇庁との関係は悪化した。1957年2月、党中央委員会はハンガリー事件によって傷ついた国外でのソ連と共産主義のイメージを修復すべく、プロパガンダの改善方法について審議した<sup>(33)</sup>。事態打開のために1958年1月に外相アンドレイ・グロムイコがイタリア平和運動(Movimento italiano della Pace)代表をモスクワに迎え、ソ連は世界平和保持に関して教皇と全く同意見であり、ヴァチカンと公式な関係を持つ意思があることを表明した。ドイツの歴史家ローランド・チェルニー＝ウェルナーはこのグロムイコ発言を、ソ連当局が少なくとも西欧世界で道徳の権威としての権能を持つ

28 イーゴリ・クラフチェンコとスヴェトザル・エフィロフの二人は、共同論文「ヴァチカンの現代社会教説のイデオロギーの基礎について」の中で、米国の「予防戦争」(preventive war)概念はピウス12世の戦争支持発言に端を発する、という指摘が複数の研究者から為されていることを紹介した。Кравченко И.И., Эфиров С.А. Об идеологических основах современной социальной доктрины Ватикана // Вопросы философии. 1962. № 6. С. 151-152.

29 同じ東欧圏でもポーランドではカトリック人口が95%を占めていたのに対し、ブルガリアやユーゴスラヴィアでは1%程であった。参照：Cerny-Werner, *Vatikanische Ostpolitik*, p. 51.

30 *Decree against communism* (検邪聖省令3865:「共産主義に反対する教令」)。質問4。「共産主義者の唯物的・反キリスト教的説を主張するキリスト信者、特にその説を弁護し宣伝する者は、その事実によって、カトリック信仰を捨てた背教者として、特別に使徒座に保留される破門制裁を受けるか。」に対して、「肯定的」という解答が出された。H. デンツィンガー編(浜寛五郎訳)『カトリック教会文書資料集』エンデルレ書店、1992年、596-597頁。

これに対し、ハンガリーでは翌日にミンツェンティ・ヨーージェフ枢機卿が逮捕され、チェコスロヴァキアでは、翌年2月に政権を掌握した共産党が「カトリック・アクション」を組織して当地のカトリック教会を分裂させ、このシスマを認めない大司教ヨゼフ・ベランを6月に軟禁した。参照：Richard S. Clark, “Czech Government Launches Bitter Attack on Catholics,” *The Register-Guard*, Dec. 29, 1948, p. 2; “Czech Catholic Action Movement ‘Takes Over’,” *The Palm Beach Post*, Jul. 21, 1949, p. 4.

31 Голованов С. Католическая церковь и Россия. СПб.: Семинария «Царица Апостолов», 1999 [http://www.vselsenskiy.narod.ru/histor.htm].

32 “Cardinal Mindszenty May Still Be a Prisoner,” *The Catholic Herald*, Sept. 23, 1955.

33 Президиум ЦК КПСС 1954-1964 Т. 2. / Гл. ред. Фурсенко А.А. М., 2006. С. 575-581.

ヴァチカンの重要性を学習した結果である、と見ている<sup>(34)</sup>。このように、スターリン死後、ソ連・ヴァチカン関係好転の可能性は若干あったが、ソ連指導部としては教皇庁との根本的関係改善は、徹底した反共主義、反ソの立場を取るピウス 12 世在位中は望めなかった。

1958 年 10 月にピウス 12 世が死去すると、ローマ・カトリックに関する著作が数多くあるソ連の学者ミハイル・シェインマン<sup>(35)</sup>は、その翌年に出版した単著『教皇庁』の中で、新教皇に選出されたロンカッリが「ピウス 13 世」と名乗らずに「ヨハネ 23 世」と名乗ったこと、および、新教皇がこれまで長年トルコやバルカン、フランスで外交官として勤務してきたことを紹介した<sup>(36)</sup>。無神論のプロパガンダを担っていた彼のこの記述からは、新教皇がピウス 12 世とは異なる新路線を取ることにソ連当局が淡い期待を寄せていたことが窺える。

## 2. ヨハネ 23 世就任後ソ連・ヴァチカン関係の変化

現在ハーヴァード大学ケネディ政治学大学院教授ジョン・ブライアン・ヘア<sup>(37)</sup>は論文「教皇の外交政策」で、西側との同盟から東側とも西側とも同盟を組まずに両者に批判的な立場へと教皇庁が舵を切ったのはヨハネ 23 世とパウロ 6 世の時であった、という見解を示した<sup>(38)</sup>。であれば、ヨハネ 23 世が対ソ融和路線へと転換したのはいつ頃なのか。また、ローマ教皇庁との関係修復を目指していたソ連は新教皇に対してどのような対応を示したのか。この節ではこの二点を明らかにしたい。

新教皇は、1959 年 1 月 25 日に行った演説の中で、1917 年に公布された教会法典の現代化計画を公表するといった<sup>(39)</sup>、教会現代化 (Aggiornamento) に熱心な人物であると同時に、キリスト教諸派の相違を超えて全キリスト教徒の結束、及び、他宗教との対話・協力を目指すエキュメニズム (Ecumenism) の推進人物でもあった。演説の中で彼は第 2 回ヴァチカン公会議 (1959 年 5 月準備開始、1962 年 10 月 11 日開催) 召集も宣告した。

しかし、教皇庁の共産主義への態度に変化は見られなかった。1959 年 3 月 25 日、「共産主義者に投票する事について」、すなわち、「カトリック信者は選挙の時に、カトリックの教

34 Cerny-Werner, *Vatikanische Ostpolitik*, pp. 54–55, 58.

35 Шейнман, Михаил М. (1902–1977) : 宗教史家であるとともに、無神論のプロパガンダを担っていた人物であり、カトリシズム史、及び、キリスト教社会主義批判を専門としていた。彼は 1945 年に戦争捕虜の身から解放されてからは、ソヴィエト科学アカデミー宗教史博物館、その後は科学アカデミー歴史研究所での勤務、また、『科学と宗教』誌編集に従事する傍ら、既に 1940 年代後半から 1950 年代前半にかけて『戦間期のヴァチカン』(1948)、『第 2 次世界大戦中のヴァチカン』(1951)、『現代のヴァチカン』(1955) といった著書を次々と発表していった。

36 Шейнман М.М. Папство. М., 1959. С. 207.

37 ヘアは 20 年間司教を務め、米国のシンクタンク、政策研究所 (IPS) で、「マタイ、マルクス (マルコではなく：藤井)、ルカ、ヨハネ」講座担当であった。IPS は 1980 年代当時、ロナルド・レーガン政権による、ニカラグア等中米への介入や西欧諸国への核ミサイル配備政策に反対する中心的存在で、ヘアは米国の外交政策への批判者として知られていた。彼以外の米国の司教達も、いかなる地域でも共産主義政権樹立を阻止する軍事力行使に反対した。Cliff Kincaid, “Is God a Marxist? Top American Catholics and the Far Left,” *World Tribute*, March 12, 2013.

38 J. Bryan Hehir, “Papal Foreign Policy,” *Foreign Policy* 78 (1990), p. 27.

39 “Pope Appoints Commission to Revise Canon Law Code,” *The Criterion* 3, no. 26, April 5, 1963, p. 1.

えの原則に反対を宣言しておらず、寧ろキリスト教的という名さえつけているが、実際は共産主義と関係が有り、またそれを支持している政党又は候補者に投票することが許されるか」という問いに対して、検邪聖省から「否定的」という解答が下された<sup>(40)</sup>。これは1949年に教皇庁から出された「共産主義に反対する教令」を踏襲するものであった<sup>(41)</sup>。

1961年5月にヨハネ23世は彼にとって最初の社会回勅『マーテル・エト・マジストラ』(母、且つ、教師)を社会回勅『レーラム・ノヴァールム』70周年を記念して発布した。ここで社会回勅『レーラム・ノヴァールム』について概説しておく。そもそも、社会回勅、ないし、社会教説という成句は、教皇庁正義と平和評議会によれば、教皇ピウス11世に遡り、レオ13世(在位:1878-1903)の回勅『レーラム・ノヴァールム』(Rerum Novarum:「新しき事柄について」;表題「資本と労働の権利と義務」、1891年公布)から始まる、ローマ教皇と、教皇と交わりのある司教達との教導権を通して教会の中で発展してきた、社会的重要性を持つ課題に関する「体系」を指している<sup>(42)</sup>。徐々に教会に普及しつつあった社会カトリシズムを反映して発布された最初の社会回勅『レーラム・ノヴァールム』では、その副題「資本主義の弊害と社会主義の幻想」が示すように、資本主義と社会主義の双方が批判されている。この回勅は、まず、資本主義が引き起こす富の偏在や、社会道徳の退廃、残酷な使用者による労働者からの搾取、といった誤りを列挙し、その是正策として賃金労働者の適切な労働時間や衛生状態、労賃について説くとともに、人格の尊厳と基本的人権を教会として初めて認めた、画期的な教説である。他方で、同回勅は、社会主義はその中心的信条が自然法に反しており、社会(Commonweal)に混乱と無秩序をもたらすと批判している。その後、数人の教皇によって回勅が発布されてきたが、この最初の社会回勅の指針は現在に至るまで中核的思想として継承されている<sup>(43)</sup>。

40 デンツィンガー編『カトリック教会文書資料集』614頁。

41 同上、596-597、614頁。

42 教皇庁正義と平和評議会(マイケル・シーゲル訳)『教会の社会教説綱要』カトリック中央協議会、2009年、80頁。

社会回勅の開始という点でレオ13世が「偉大な先駆者」と呼んだのが、「労働者の司教」と呼ばれたマインツ司教ウィルヘルム・エマニュエル・ケテラー(1811-1877)である。当時のドイツではマルクスよりもカトリック教会の司教達による労働者問題への関わりの方が、労働者のみならず、農民、職人といった幅広い大衆の注目・支持を集めていた。1860年代には、既にカトリック労働者同盟、ウェストファリア農民組合、カトリック職人組合といった組織が、カトリック教会が中心となって作られていた。また、ベルギーやフランス、イタリアでも19世紀から20世紀初頭にかけてカトリックの社会思想が普及していた。他方フランスでは既に1830年の七月革命後には、国民間での反カトリック感情の高揚を受けて、修道院長フェリシテ・ド・ラムネー(1782-1854)等、カトリック自由主義(Le catholicisme libéral)を奉じる一派が『アヴニール(未来)』紙で、企業家による職人や労働者からの搾取、富の偏在といった社会問題を取り上げていた。桜井健吾「訳者はしがき:ケテラーと現代」W. E. フォン・ケテラー『労働者問題とキリスト教』晃洋書房、2004年; Paul Misner, *Social Catholicism in Europe: From the Onset of Industrialization to the First World War* (New York: Crossroad Pub. Co., 1991), pp. 50-55; 菊池「ヴァチカンとクレムリン6」『世界』162号、1959年、315-316頁; Karl Marx, Frederick Engels, *Marx/Engels Collected Works*, vol. 43 (London: Lawrence & Wishart, 1988), p. 353.

43 教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』82頁; P. ヘンリオット、E. デベリ、M. シュルタイス(イエズス会社会司牧センター訳)『カトリック社会教説』ドン・ボスコ社、1989年、40-41頁。



社会回勅『マーテル・エト・マジストラ』は、70年前の『レーラム・ノヴァールム』で指摘された深刻な貧富の不公平が世界に散在することを訴えた点で、主に斬新さがあった。第一に、先進地域、後進地域間の不平等顕在化を指摘し、また、植民地主義縮小を求めるといった、「第三世界」への配慮、第二に、国際関係の相互依存性、協力と相互扶助の必要性を述べて国際協力を訴えた点である<sup>(44)</sup>。

その後、反共産主義理論家で、前教皇と見解を共有していた教皇庁國務省のドメニコ・タルディーニ枢機卿<sup>(45)</sup>が1961年7月に病死すると、教皇は、それ以降国際社会の緊張緩和のためにヴァチカンの外交スタイルに変化をもたらし、国際社会の諸問題に幅広く主体的に関与することとなる。同年6月初旬、周知のように、ドイツ処理をめぐるウィーンでのフルシチョフ＝ケネディ会談で話し合いが決裂し、8月中旬にベルリンに東西を分断する壁が建設された。その月末のソ連による核実験再開表明後の9月10日に、教皇はラジオ・メッセージで米ソ両国の指導者に対して平和的問題解決を訴えて次のように述べた。「戦争は、私達に親しまれた個人の姿、人民全体の姿、国家全体の姿の全てを、破壊し消滅させるに十分であります。人間の才能が、世界の不幸のために日夜開発し続けている新しい破壊と滅亡の武器の力に使われるならば、一体どうなるのでしょうか」<sup>(46)</sup>。彼は同時に、その数日前のベオグラードでの第一回非同盟諸国会議でのティトー、ネルーらによる共同宣言を支持した。フルシチョフは教皇のこのメッセージに対して次の様に論評し、それが9月21日付の『プラヴダ』と『イズヴェスチヤ』に掲載された。「私はローマ法王のメッセージを読んだ。興味深く読んだと言わなければならない。今、我々は、西側の侵略勢力が点火した危険に対して抗議をあげる全ての公的人物の発言を、傾聴しなければならない。〔中略〕ケネディやアデナウアーその他のカトリック信奉者達は、果たしてローマ法王の神聖な警告に注意を払うだろうか。カトリック教会の首長が、帝国主義者達の戦争準備に心煩わされている世界各地の夥しいカトリック教徒の気持ちを、考慮に入れていることは明らかである」<sup>(47)</sup>。

その後、11月14日に教皇戴冠3周年記念日に満80歳祝賀式典が繰り上げて行われた際、フルシチョフは、モスクワを訪問したイタリア共産党書記長パルミーロ・トリアッティの助言に基づき、誕生日を祝う電報を送った。これに対し、教皇はフルシチョフに返電を送り、その中で、全ロシアの人民が友愛に基づいた理解によって世界平和を強化するよう望んでいる事に感謝した<sup>(48)</sup>。こうしてベルリン危機以降、ソ連・ヴァチカン関係は首脳間の個人的接触を基に構築されていった。現在ロシア科学アカデミー欧州研究所教授で、1950年代末

44 ヘンリオット他『カトリック社会教説』53-60頁。

45 George Weigel, *The Final Revolution: The Resistance Church and the Collapse of Communism* (New York: Oxford University Press, 2003), p. 66.

46 以下から一部抜粋。沢田和夫、エメシエギP. 訳編『地上に平和を：ヨハネス23世の道』春秋社、1966年、15頁。

47 Peter Hebblethwaite, ed. by Margaret Hebblethwaite, *John XXIII: Pope of the Century* (New York: Continuum, 2005), p. 202; *Петрушко В. Папа Иоанн XXIII и украинские униаты // Русская народная линия. 21.02.2006* [[http://ruskline.ru/monitoring\\_smi/2006/02/21/papa\\_ioann\\_xxiii\\_i\\_ukrainskie\\_uniaty/](http://ruskline.ru/monitoring_smi/2006/02/21/papa_ioann_xxiii_i_ukrainskie_uniaty/)]; 小坂井『法王ヨハネ二十三世』441頁。

48 Hebblethwaite, *John XXIII*, p. 202.

から1960年代前半にタス通信イタリア特派員であったアナトリー・クラシコフは、フルシチョフによる国内での反宗教政策推進と外交政策の齟齬について、フルシチョフが教皇庁を西側陣営における国際法の主体の重要な一つと看做し、戦争回避の選択肢として、国内の反宗教政策とは切り離して、この世界規模の宗教団体との平和共存政策を追求した結果であると説明している<sup>(49)</sup>。

教皇庁は1961年12月25日に公布した教会憲章「フマネ・サルゥティス」(Humanæ Salutis)で第2回ヴァチカン公会議の1962年開催を宣告した。教皇は、エキュメニズム推進の立場から、公会議へのロシア正教会の参加を希望し、ソ連当局との折衝を部下に指示した。フランス随筆家ジャン・マディランは著書『メッツ協定』(2007)で、1962年にロシア正教会の「外務大臣」であるメトロポリタン・ニコディム(KGB暗号名ADAMANT<sup>(50)</sup>)とユージェヌ・ティッセラン枢機卿との間で、公会議にロシア正教会から代表者を出席させるための諸条件について協議し、公会議で共産主義に言及しないという密約が交わされたことを明らかにした<sup>(51)</sup>。他方でクラシコフは、ヨハネ23世の秘書官を務めたロリス・フランチェスコ・カポヴィツラ大司教と2008年11月に行った会談の中で、1962年8月25日付のKGB機密文書によれば、KGB当局はロシア正教会代表の公会議への派遣失敗を必死に画策したが、党中央委員会は公会議開催前日の10月10日に派遣許可の決定を下した、と述べた<sup>(52)</sup>。

カリム・シェルケンスによれば、ロシア正教会のオブザーバー2名の登場にユニエイトのディアスポラ司教達は愕然とし、公会議の場での2者間の対立は頂点に達しようとした。司教達は自分達がヴァチカンから見捨てられたと感じて正教会のオブザーバーに対する様々な反発行動に出たが、キリスト教一致推進評議会(SPCU)から歓迎されず、またヨハネ23世も彼らにロシアのオブザーバーに対する反発行動を控えるように要請した<sup>(53)</sup>。

この様に、第2回ヴァチカン公会議をエキュメニズム推進成功の場としたかった教皇庁と、共産主義の正当性の西側社会での認知と共に、国際法主体の一つと看做していたヴァチカン市国との平和共存をかねてより望んでいたソ連指導部との思惑が一致し、教皇庁は政治的に中立路線を取ることとなり、採択文書への共産主義非難の文言挿入という司祭達からの請願書を却下した。後にヨハネ=パウロ2世となるカロール・ヴォイティワ司教もこれらを却下する側に回った<sup>(54)</sup>。すなわち、この第2回ヴァチカン公会議開催に向けた準備段階で二者間の関係が新たな段階へと向かいつつあったと言える。

---

49 Красиков, Крестьянский сын.

50 Christopher Andrew, *The Sword and the Shield: The Mitrokhin Archive and the Secret History of the KGB* (New York: Basic Books, 1999), p. 487.

51 Madiran, *L'accord de Metz*; Pentin, "Why Did Vatican II Ignore Communism?"

52 Красиков, Крестьянский сын. クラシコフはタス通信記者として公会議翌日システーナ礼拝堂で教皇に接見。

53 Schelkens, "Vatican Diplomacy after the Cuban Crisis," pp. 692–694.

54 Pentin, "Why Did Vatican II Ignore Communism?"

### 3. キューバ危機から社会回勅『地上の平和』（Pacem in Terris）へ

1962 年 10 月、ソ連によるキューバへの核ミサイル配備をめぐる米ソ対立が核戦争の様相を呈し始めた。本節では、この危機に際してヨハネ 23 世が戦争回避のために取った言動がその後ヴァチカン・ソ連関係にどう影響したのか。また、共産主義諸国との平和共存路線を打ち出した回勅『地上の平和』がフルシチョフによって、および、『哲学の諸問題』誌上でどう評価されたかを、先行研究や資料に基づいて概観することで、ソ連・ヴァチカン外交関係樹立過程の明示を目指す。

#### 3-1. キューバ危機への教皇の対応、及び、フルシチョフの娘と娘婿による教皇公式訪問

1962 年 10 月下旬に入り、ソ連からキューバに持ち込まれたミサイルをめぐる米ソ対立で全面核戦争突入の危険性がいよいよ高まった。シェルケنزによれば、1962 年 10 月 24 日、危機が最高潮に達していた頃、ケネディ、フルシチョフ双方とコネを持ち、両国を行き来しているジャーナリストのノーマン・カズンズ<sup>(55)</sup>は、首都ワシントンのある筋から情報を十分に提供された。彼は、自分の親友であるドミニコ会士フェリックス・モルリオンを通じて、教皇に米ソ両サイドに自制を促す特別な訴えをしてくれるよう依頼した<sup>(56)</sup>。カポヴィツラ大司教によれば、同日、ローマに飛んだカズンズはイジーノ司祭（当時）を通じて教皇に事の次第を伝えた。教皇はまず部下に声明文の下書きを用意させ、最後の 3 行以外全て自身で書き直し、その写しを米ソ両大使館に配布した。翌朝 7 時にフルシチョフから肯定的返事が送付され、11 時にケネディからも同意の返事が来た<sup>(57)</sup>。同日 25 日に教皇はヴァチカンのラジオで、交渉による戦争回避を呼びかける次のメッセージを読み上げた。「平和を守るために凡ゆる努力を払って頂きたい。そうすれば、誰もその恐ろしい結果を予知し得ない戦争を、世界は避けることができるであります。交渉を継続するように。何故なら、この誠実で率直な態度こそ、各人の正しい良心を示し、歴史の前で真意を証拠立てる重大な価値を持っているからであります」<sup>(58)</sup>。

また、現代ロシアのあるカトリック紙は当時の状況について、教皇は夜に双方に電話で核戦争を防ぐよう訴えた、と伝えている<sup>(59)</sup>。教皇のこの言動の背景として、ジョン・ヘアは、面目を大して潰さずに対立の段階的收拾を正当化できるように介入して欲しいという両サイドからの示唆に教皇が応えたのだ、と説明している<sup>(60)</sup>。

この危機回避のための教皇による米ソ仲介の働きが、ソ連・教皇庁関係を結果的に一層改

55 Norman Cousins (1915–1990): アメリカ合衆国出身のジャーナリスト、作家。広島市特別名誉市民。

56 Schelkens, “Vatican Diplomacy,” p. 696.

57 Renzo Allegri, “Unusual Alliance: Messenger of Saint Anthony” [http://www.saintanthonyofpadua.net/messaggero/pagina\_stampa.asp?R=&ID=193].

58 沢田、エメシエギ『地上に平和を』19 頁。このメッセージは翌日『プラウダ』紙の一面に掲載。

59 Слово Владыки Иосифа Верта на торжество Святой Пятидесятницы // Сибирская католическая газета. 4 июня, 2012 [http://sibcatholic.ru/2012/06/04/slovo-vladyki-iosifa-verta-natorzhestvo-svyatoj-pyatidesyatnicy/].

60 Hehir, “Papal Foreign Policy,” p. 29.

善へと向かわせ、またこれを転機に、ヴァチカン外交スタイルが、共産主義諸国封じ込め政策から、社会主義体制との平和共存によって辛抱強く崩壊を待つ政策へと転換した、とヘアは述べる<sup>(61)</sup>。しかしむしろ、ベルリン危機の頃から兆候はあったが、キューバ危機を通じて転換が確実になったと見るべきであろう。

シェルケンスによれば、1962年12月14日、カズンズはローマからモスクワへ飛んでフルシチョフと長時間にわたって会談し、キューバ危機回避のために教皇が果たした役割について説明するとともに、ヨゼフ・スリピー大司教釈放を持ちかけた。この会談でフルシチョフは約15分使って、彼が1940年から関与してきたスリピーの案件について存分に話した後、スリピー釈放の可能性を匂わせる発言をした。1963年1月18日にカズンズは駐米ソ連大使アナトリー・ドブリニンに昼食に呼ばれた。彼は、更に条件を付けることなく、しかも新たな裁判なしに、ヨゼフ・スリピー大司教を流刑地のシベリアから釈放するという、フルシチョフの決定を知らされた。カズンズとモルリオン修道士は公衆電話でヨハネス・ヴィレブランツ枢機卿にそのことを伝え、枢機卿が教皇に伝達した。1月25日までは駐伊ソ連大使セミヨン・コズィレフからイタリア首相アミントレ・ファンファーニにスリピー釈放が伝えられていた<sup>(62)</sup>。ロシア正教会への第2回ヴァチカン公会議参加の説得と共に、スリピーのローマへの亡命工作のためにモスクワに派遣されていたキリスト教一致推進評議会書記ヴィレブランツに伴われ<sup>(63)</sup>、スリピーは2月10日ローマに到着し、教皇に接見した。

キューバ危機で核戦争回避のためにヨハネ23世が果たした役割は国際的に高く評価され、3月にバルザン平和賞受賞が決まった。フルシチョフの次女ラーダは自分達夫妻が教皇に謁見するまでの経緯を次のように回想している。党第一書記の使者達がソ連のジャーナリストと教皇との会見の下準備という秘密の使命を帯びてローマ入りした。ソ連公人の教皇との単独会見の情報は、モスクワでは当初疑念をもって受け取られ、中央委員会協議会ではヴァチカンとの接触に対し反対意見が多く出たが、最終的にはフルシチョフが許可決定を下した<sup>(64)</sup>。出発前にフルシチョフはアジュベイに教皇への個人的書簡を託した。2月末に夫妻はローマに到着し、教皇に接見したい旨を述べた。カポヴィツラの回想によれば、皆が反対したが、教皇は熟慮の末スリピー釈放への返礼としてこれを許可し、日取りは3月7日に設定された<sup>(65)</sup>。ヴァチカン宮殿での平和賞授賞式に夫妻は取材を兼ねて出席した。ラーダの回想によれば、式典後、ローマ教皇庁立東方研究学院に勤務し、公会議でロシア正教会代表の通訳を務めていたアレクサンダー・クリークの助言で、二人はその場に残り、その後、教皇の私用書齋に請じ入れられ、フルシチョフの手紙をヨハネ23世に手交した。教皇はアジュベイにフルシチョフへの手紙を手渡し、ローマにソ連指導者を招待し、直接懇談したい旨述べた<sup>(66)</sup>。しかし、この3ヶ月後に教皇自身が死去したので実現しなかった。

61 Ibid., pp. 29–30.

62 Schelkens, “Vatican Diplomacy,” pp. 705–706.

63 Peter Hebblethwaite, “Cardinal Johannes Willebrands: Dutch Churchman who lost the struggle over ecumenism,” *The Guardian*, August 4, 2006.

64 Богданов. Хрущев поступался к Папе.

65 Allegri, “Unusual Alliance.”

66 Богданов. Хрущев поступался к Папе.

### 3-2. 社会回勅『地上の平和』発布、及び、フルシチョフの反応

ヨハネ 23 世は 4 月 11 日に彼にとっては最後となる社会回勅『地上の平和』を発布した。この回勅は初めてカトリック教徒のみならず「善意ある全ての人々」に向けられた画期的なものであった<sup>(67)</sup>。この回勅の普遍的性質は前年にキューバ危機という人類存亡の危機に直面したことで、軍備競争の即時停止が、キリスト者と非キリスト者とを問わず、最重要課題となったことを示している。それ故、ここでは「国家間の真の恒久平和は軍備の均衡によって維持されるとの原理を、真の平和は相互信頼の中にしか確立できないという原理に置換する」ことが謳われている<sup>(68)</sup>。

ソ連指導部がこの回勅に認めたもう一つの重要な点は、「誤った」哲学的理論と、経済的・社会的・文化的・政治的運動とを区別すべきであるとした次の一節である。「自然、世界と人間の起源及び目的に関する誤った哲学的理論と、経済的・社会的・文化的・政治的運動とを区別すべきである。仮令、それらの運動がそれらの哲学的論から導き出され、着想されている場合でも、両者を区別すべきである。何故なら、決定的に定式化された理論は変化する事はないが、変化する状況の中での運動は変化する状況と無関係である事はできないからである。更に、これらの運動の中には、正しい理性の諸原則と人間の正当な要求に応えるものであれば、善いもの、承認すべきものがあることを否定できるであろうか」<sup>(69)</sup>。

アジュベイが編集長を務める『イズヴェスチヤ』紙は即日この回勅を掲載した。ヨハネ 23 世が発布した回勅『地上の平和』発表の約 10 日後、フルシチョフは、ミラノの『イル・ジオルノ』紙編集長イタロ・ピエトラとのクレムリンでの単独会見で、新回勅を称賛し、平和のために努力する教皇を支持して次の様に述べた。「ヨハネ 23 世が従来教皇と違っている点は、現代の緊急問題に対して現実的態度を取り、平和と軍縮の問題を第一の問題として取り上げていることである。我々は、平和の為に努力する教皇の立場を支持する。共産主義はいかなる宗教的考えも受け入れないが、平和を守るためには、凡ゆる勢力が協力することが必要だと信じる<sup>(70)</sup>」。このように、1950 年代まで社会主義体制打倒を唱道していた教皇庁が、一転してソ連が 1950 年代半ばから謳ってきた「平和共存」に共鳴する方針を公的に全世界に向けて出したことに、フルシチョフは歓喜した。

翌年『哲学の諸問題』誌に、イーゴリ・クラフチェンコ<sup>(71)</sup>とスヴェトザル・エフィ

67 この回勅はローマ・カトリック教会内でマルクス主義を信奉する司祭者達に影響を与え、彼らは回勅 50 周年を記念する「平和構築」会議（2013.4.）に参加し講演を行った。以下を参照。

PEACEBUILDING: Pacem in Terris at 50, University of Notre Dame 2013 [http://kroc.nd.edu/news-events/events/2013/04/09/1473].

68 *Pacem in Terris, Encyclical of Pope John XXIII on Establishing Peace in Truth, Justice, Charity, and Liberty*, April 11, 1963 [http://www.vatican.va/holy\_father/john\_xxiii/encyclicals/documents/hf\_j-xxiii\_enc\_11041963\_pacem\_en.html]. 日本語訳は沢田、エメシエギ『地上に平和を』52 頁参照。

69 デンツィンガー『カトリック教会文書資料集』632 頁。

70 Правда. 24.04.1963. № 114; “Khrushchev Says West Is Forcing Test-Ban Review,” *New York Times*, April 22, 1963; 多津木『キリストとマルクス』175 頁。

71 Кравченко Игорь Иванович (1924 生)：政治哲学、宗教哲学、言語学が専門。モスクワ生まれ。1950 年モスクワ国立教育大学フランス語学部を卒業。1957 年モスクワ州教育大学 (МОПИ) 大学院教育学部を修了。1957–1960 年リャザン教育大学外国語学部で講師を務める。1960–1964 年ソ連科学アカデミー哲学研究所に勤務。1964–1973 年『哲学の諸問題』誌科学顧問兼副主任。

ロフ<sup>(72)</sup>の共著によるこの回勅に関する論文「ヴァチカンの現代社会教説のイデオロギーの基礎について」が掲載された。この論文の中で二人はこの回勅には進歩性と伝統性の二面性があり、イデオロギー上の原理においていくつか新しい要素が出現していることを指摘した。その一つとして彼らが挙げているのが、共産主義への公然たる非難、および、共産主義そのものへの言及の欠如である<sup>(73)</sup>。確かに、この回勅の中でマルクス主義と共産主義に言及している箇所はレオ13世とピウス11世の社会教説を要約している二箇所のみであるが、全くないわけではない<sup>(74)</sup>。その代わりに教皇庁が共産主義の思想に対抗するために新たに提起した概念として、二人は回勅の中で展開された「社会化」（当時、英文献では *socialisation* と訳されたが、教皇庁は現在この訳語の使用を避けるか、該当箇所を削除している<sup>(75)</sup>）という用語に着目し、社会化（*социализация*）に関する文章のロシア語訳を披露して、教皇庁による資本主義と社会主義との収斂論を紹介した<sup>(76)</sup>。当時の英訳によれば、「社会化」とは、「我々の時代を特徴付けている典型的な側面の一つ」であり、「最も重要な問題にさえ公権力の介入が増大する因果関係である」。また、「社会化は数多くの利点をもたらすことは明らかである。実際、例えば、健康維持に不可欠な手段を講じる権利、公共医療サービスを受ける権利、高等教育を受ける権利、〔中略〕といった、特に経済的・社会的と呼ばれる個人の諸権利を充足させることを可能にする。しかし、同時に、社会化は形式や組織を増殖させ、あらゆる階層の人々の中の諸関係への法律上の統制を一層詳細にする。結果として、人の行動の自由に関しては個人の枠を制限する。ゆえに、我々は、社会化からそれ自体が含んでいる利点を引き出し、否定的側面を取り除くか抑制するように、社会化を実現し得るし、すべきであると考え」<sup>(77)</sup>。また、回勅には、「国家その他の公共団体が生産財を所有することを禁止するものではない。特に「生産財が巨大過ぎて個人に任せておくと一般社会に有害にな

72 Эфиров Свегозар Александрович (1926–2010)：哲学史と社会学史が専門。モスクワ生まれ。1950年モスクワ国立大学哲学部卒業。1955年ソ連科学アカデミー哲学研究所大学院を修了後、同研究所、モスクワ国立教育大学、社会学研究所にて勤務。1969年博士論文「20世紀イタリアのブルジョア哲学の主流と傾向」の公開審査をパス。

73 Кравченко, Эфиров. Об идеологических основах. С. 146.

74 デンツィンガー『カトリック教会文書資料集』616頁。「経済界における、いわゆる自由競争もマルクス主義の階級闘争も、自然およびキリスト教的人生観に反するものだからである。〔中略〕ピウス11世は、「共産主義」とキリスト教は根本的に対立するものであることを指摘し、たとい穏健だと思われる「社会主義」であっても、カトリック教徒は決してこれを支持してはならないといっている」。

75 Mater et Magistra: Encyclical of Pope John XXIII on Christianity and Social Progress [[http://www.vatican.va/holy\\_father/john\\_xxiii/encyclicals/documents/hf\\_j-xxiii\\_enc\\_15051961\\_mater\\_en.html](http://www.vatican.va/holy_father/john_xxiii/encyclicals/documents/hf_j-xxiii_enc_15051961_mater_en.html)].

76 Кравченко, Эфиров. Об идеологических основах. С. 146–147.

77 “Excerpts From Pope John’s Encyclical on Workers,” *The Milwaukee Journal*, Thursday, July 20, 1961, p. 22. 1960年代前半、この用語を巡る議論は欧米でも交わされた。John XXIII: Mater et Magistra — A Bibliography by Gerald Darring [[http://www.shc.edu/theolibrary/resources/bibliog\\_mater.htm](http://www.shc.edu/theolibrary/resources/bibliog_mater.htm)].

る場合」にはそうである。」という文言がある<sup>(78)</sup>。いくつかの先行研究は、社会主義や共産主義政権公認とも取れるこの一節と、その直後に実施されたイタリア議会両院選挙での共産党の得票率伸長（各々 1/4 以上）との因果関係を認めている<sup>(79)</sup>。

教皇庁はソ連との平和共存を利用して、東欧諸国での宗教の自由を求めて各政府と交渉を行う、いわゆる「東欧外交」(*Ostpolitik*) を活発化させることにし、カザロルリ国務省次官を各地に派遣した。教皇はまずブダペストとプラハに彼を派遣し、ヴァチカンが東欧全域で当地のローマ・カトリック教会の司教任命等、介入の具体的方策を練らせた<sup>(80)</sup>。ヨハネ 23 世はその成果を見ずに 1963 年 6 月に死去し、その施策と平和共存路線は次の教皇パウロ 6 世に継承された。

このように、米ソ間対立が熱核戦争に転化する可能性を孕んだ時代において、教皇は前任者のように正義のためには先制攻撃は正当化されるという立場を取らず、むしろ、危機回避のために両者に働きかけるという行動に出た。それは結果的にクレムリンとヴァチカンの両首脳間の個人的信頼関係を深化させ、ソ連史上初めて、指導者の代理としてその娘と娘婿とが教皇に謁見し、教皇もソ連指導者との会見のためにローマに招待するに至った。さらに、社会回勅『地上の平和』によって教皇庁は少なくとも表面上は社会主義体制との平和共存路線を採用し、1950 年代からそれを渴望していたフルシチョフはこの回勅を歓迎したのである。

## まとめ

欧米やロシアでの近年の先行研究や回想、および、ソ連でのローマ・カトリック研究を総括すると、ソ連とヴァチカン関係の好転は、フルシチョフや教皇ヨハネ 23 世といった個人的要因、および、ベルリン危機やキューバ危機、ヴァチカン公会議開催といった時事的要因によるものであったと言える。クラシコフが指摘したように、フルシチョフは、国内では反宗教政策を推進する傍ら、世界規模の宗教団体であるローマ教皇庁を西側の重要な国際法上の主体と看做し、この宗教団体との平和共存政策を追求した。しかし、教皇ピウス 12 世の在位中は彼の共産主義に対する敵対心が薄れることはなく、関係好転は期待できなかった。フルシチョフと次の教皇ヨハネ 23 世との個人的関係に関しては、相互に好印象と期待とを持っていたことが窺える。それは、小坂井が指摘したように、ウクライナ国境と北イタリアの貧しい農村の出という出自の類似性<sup>(81)</sup>にある程度よるのかもしれない。それに加えて、

78 デンツィンガー『カトリック教会文書資料集』620 頁。教皇庁正義と平和委員会の見解によれば、ヨハネ 23 世が、対決姿勢の実施役とも言うべきカトリック行動団 (*Azione Cattolica*) の政治行動を禁止するとともに、この回勅によって当時のイタリア中道左派政権 (ファンファーニ内閣) の路線 (キリスト教民主主義書記長モーロが提唱した「左への開放」) を支持したことによって、1962 年のイタリアの電力国有化が可能となった。橋本『バチカンの行動原理』107 頁。

79 例えば、橋本『バチカンの行動原理』144-145 頁。

80 Hehir, “Papal Foreign Policy,” p. 30; Pentin, “Why Did Vatican II Ignore Communism?”

81 小坂井『法王ヨハネ二十三世』442 頁。ヨハネ 23 世はキューバ危機の後にヴァチカンを訪問したノーマン・カズンズに、「彼も私も小さな村の生まれだ。我々はともに農夫の出だ。我々はきっとお互いを理解し合えるに違いない」と語った。同上、480 頁。

ベルリン危機やキューバ危機の際の教皇による米ソ双方への平和アピール、および、それへのフルシチョフの呼応が二人の間に信頼関係を生じさせた。その後のヨゼフ・スリピー大司教釈放、および、アジュベイ夫妻の教皇謁見は二人の間の関係深化を反映したものである。もう一つの要因は、ヨハネ 23 世が、自身が召集したヴァチカン公会議をエキュメニズム推進の場として成功させるためにソ連との関係改善を必要とし、そのためにはソ連との秘密協定締結もやむなしとしたことである。社会回勅『地上の平和』はその前の社会回勅『マーテル・エト・マジストラ』よりもさらに踏み込んで、平和への希求、現世における救済策としての資本主義と社会主義の収斂論、および、共産主義諸国との融和政策で構成されている。これらのいずれも教皇庁に対するソ連側の高い評価へと繋がったことが、フルシチョフの発言と『哲学の諸問題』誌の論説からうかがえる。ジャーナリストのノーマン・カズンズらを介した、フルシチョフとヨハネ 23 世の相互の働きかけがソ連とヴァチカンの関係構築へと道を開いたのである。

本稿はフルシチョフとヨハネ 23 世の間の個人的な首脳外交に焦点を当てた論稿である。よって、当時のソ連共産党の他の政治局員がフルシチョフのこのような対ヴァチカン外交をどのように評価していたかについての研究が今後の課題となるであろう。また本稿では、フルシチョフ期ソ連でのローマ・カトリック研究を一部しか紹介できなかった。日本の旧ソ連・東欧研究では東方教会に関心が偏り、管見の限り、ソ連でのローマ・カトリック研究史に関する研究は稀有であり、今後ソ連・ヴァチカン関係の解明を進めるうえで重要な課題となる。